

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	海洋研究科学委員会
	英	Scientific Committee on Oceanic Research (略称 SCOR)
	団体 HP (URL)	http://www.scor-int.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 (有) ・ 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>SCOR は、その母体である ISSC (現 ISC) が 1957 年に導入した最初で唯一の海洋研究に関する学際的学術組織である。昨今、人間活動に伴う地球環境や生態系の変化、変動や地球気候の変化、変動における海洋の重要性から益々その役割が増大している。こうした背景のもとで人間活動とモンスーンや気候変動が輻輳するインド洋において学際的な国際調査研究 IIOE-2 が 2015 年 12 月にユネスコ政府間海洋学委員会 (UNESCO IOC) との共同で 50 年ぶりに開始された。これまで推進してきた大型国際計画 GEOTRACES, SOLAS, IMBER, GEOHAB などに加えて、人間活動に起因する海洋内部の騒音と海洋生態系との関係解明など新しい視点からの研究計画 (IQOE) も始まっている。</p>	
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	<p>温室効果気体の増大に伴う海洋中の炭素循環や海洋酸性化と生態系の関係などを明らかにする海洋生物地球化学の国際計画 IOCCP をユネスコ政府間海洋学委員会と連携して推進しており、IPCC に基盤的な面から大きく貢献している。海洋物理、化学観測に不可欠な標準海水の国際新基準 (TEOS-10) の導入も重要な貢献になっている。特に SCOR は海洋科学研究を国際的に推進するために作業委員会 (WG) を国際公募し、毎年 3 件程度を選んで 3-4 年間にわたり研究助成を行って来た。これまでに 157 件 (2018 年 11 月現在) の作業委員会が助成を受けて、海洋科学の様々な先端的テーマを国際共同により推進してきたことは特筆すべきである。SCOR はまた日本財団の支援を受ける POGO (Partnership for Observations of the Global Ocean) 等と連携して客員教授、フェロウシップ制度の導入や途上国研究者の国際会議への参加支援等を行っている。</p>	
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	<p>我が国は SCOR における最重要国 (米国、ロシア、日本) の一つであり、幹部役員 (副議長など) を度々務めるとともに、総会、執行理事会において作業委員会選定、途上国支援、ジェンダーバランス、財務関係、規約改正等において活発な発言を行っている。平成 14 年には POGO に客員教授の枠を設けたのは我が国のイニシアティブである。SCOR が ICSU に推薦した津波専門家は日本からの提案による。最近では青山道夫 (現 福島大学) らが提案した海洋栄養塩測定比較実験と認証標準物質 (CRM) の導入に関する作業委員会 (WG147) が活発な活動を行っている。またインド洋の学際的な国際調査研究 IIOE-2 は山形俊男らのインド洋の気候変動であるダイポールモード現象の発見が重要な契機となっている。</p>	
加入していることによる日	<p>SCOR は ISC の下で、学際的な海洋科学における唯一の学術団体であ</p>	

様式第 2 (第12条関係)

<p>本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて</p>	<p>り、我が国はこれまで IGY、IIOE-1 (インド洋調査)、CSK (黒潮調査)、IBP (国際生物計画) などに積極的に参加、また主導して国際共同研究の実績を積み上げ、海洋科学面における国際信用を高めてきた。最近では IGBP など北西太平洋における研究に主導的な役割を果たし、GEOTRACE 計画においても主要参加国として成果を発表して、わが国の研究への国際的信頼を勝ち得ている。SCOR に加盟し、大型国際研究の最新情報の交換の場として、また先端海洋科学を競い合う場として活用することは、日本学術会議傘下の日本海洋学会、日本地質学会、土木学会、日本海水学会、日本気象学会、日本地球化学会、日本水産学会、水産海洋学会、日本プランクトン学会、日仏海洋学会、日本海洋政策学会などの学術、社会啓発活動、ひいては国民や社会の海洋科学への理解の増進に向けて多大なメリットがあるといえる。学術面に加えて、我が国が海洋国家として海洋科学の国際組織において重要な立場を持続的に展開していくことは、国家管轄権外区域の海洋生物多様性 (BBNJ) 問題などで、国連海洋法条約が海洋科学に基づいた新しい枠組みの構築に向かっている折からも極めて重要であることも力説したい。2012 年にリオデジャネイロで開催された国連持続可能な開発会議 (Rio+20) で採択された成果文書「我々が求める未来 (Future We Want)」が「BBNJ の保全と持続可能な利用について、国連海洋法条約の下で新協定の採択を含めて早急に取り組む」と明記したことに基づき、2015 年 6 月に国連総会は「BBNJ の保全と持続可能な利用に監視、国連海洋法条約の下の国際的な法的拘束力のある文書を作成する」と決議しているからである。SDGs に対応して、国連は 2017 年 12 月に「持続可能な開発のための海洋科学の 10 年 (2021-2030 年)」を総会決議しており、SCOR はますますその重要性が増している。</p>
<p>その他 (若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)</p>	<p>SCOR は若手研究者の育成、男女共同参画の推進、途上国研究者への配慮、地理的バランスなどを重要な指針としている。作業委員会の選定においても、そうした配慮がなされていない提案は低い評価を受ける。科学者の倫理に関する基本方針は母体である ISC の方針に準じている。</p>

2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

<p>総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)</p>	<p>2002 年に年會を札幌に招致して以来、久しく時が経過しているため 2019 年の年會を誘致し、富山にて日本海洋学会の秋季学会と一部連携して開催した。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定について</p>	<p>副議長に立候補していた SCOR 分科会副委員長の張 勁教授が 2018 年 9 月の年會において副議長に選任された。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて</p>	<p>新たな作業委員会の国際公募が 2019 年春に始まり、これまでのように関連学会等に広く提案を募った。</p>

様式第2 (第12条関係)

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第11条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去5年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2014年(開催地:プレーメン)、 2016年(開催地:ソポト)、 2018年(開催地:プリマス)		
	理事会・役員会等開催状況	2013年(開催地:ウエリントン) 2015年(開催地:ゴア) 2017年(開催地:ケープタウン) 2019年(開催地:富山) (2019年より、総会、理事会をともに年会と呼称することになっている)		
	各種委員会開催状況	2013年(開催地:ニューオーリンズ他11件)、 2014年(開催地:ホノルル他14件)、 2015年(開催地:ブレスト他12件) 2016年(開催地:ニューオーリンズ他10件) 2017年(開催地:ラホヤ他3件) 2018年(開催地:ポートランド他11件)		
	研究集会・会議等開催状況	2013年(開催地:ゴア他1件)、 2014年(開催地:ベルゲン他1件)、 2015年(開催地:キール他3件) 2016年(開催地:ニューオーリンズ他6件) 2017年(開催地:ロンドン他10件) 2018年(開催地:ロンボク他12件)		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	<p>総会、執行理事会のみ記す。</p> <p>2011年、執行理事会(ヘルシンキ)、2名(うち代表派遣:池田元美)</p> <p>2012年、総会(ハリファックス)、3名(うち代表派遣:池田元美、蒲生俊敬)</p> <p>2013年、執行理事会(ウエリントン)、3名(うち代表派遣:蒲生俊敬)</p> <p>2014年、総会(プレーメン)、3名(うち代表派遣:蒲生俊敬)</p> <p>2015年、執行理事会(ゴア)、2名(うち代表派遣:山形俊男)</p> <p>2016年、総会(ソポト)、2名(うち代表派遣:山形俊男)</p> <p>2017年、執行理事会(ケープタウン)、2名(うち代表派遣:山形俊男)</p> <p>2018年、総会(プリマス)、1名(うち代表派遣:派遣決定者の事情により中止)</p> <p>2019年、執行理事会(富山)、5名予定</p>			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況(過去5年)	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	副議長	2011~2014	田口 哲	(22期) 会員・連携
	副議長	2019~2022	張 勁	(24期) 会員・連携
		~		() 期) 会員・連携
		~		() 期) 会員・連携
		~		() 期) 会員・連携

様式第 2 (第12条関係)

出版物	1 定期的 (年 4 回) 出版物名 SCOR Newsletter (年 1 回) 出版物名 SCOR Proceedings
	2 不定期 (SCOR 作業委員会報告等) 主な出版物名 Special Issue of <i>Marine Chemistry</i> (Volume 173, Pages 1-342) など
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 (http://scor-int.org/work/publications/)	

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第 3 条、4 条、5 条)

国内委員会 (内規 4 条第 3 号)	委員会名	SCOR 分科会
	委員長名	山形俊男
	当期の活動状況	<p>(開催日時 主な審議事項等)</p> <p>2017 年 11 月 29 日第一回分科会 :</p> <p>1. 山形委員長が互選により選ばれた。副委員長に張、窪川が、幹事に蒲生、沖野が就任した。</p> <p>2. 川口慎介連携会員に委員就任を打診することになった。委員長から、地球惑星科学委員会に報告し、事務局を通して幹事会に提案する。</p> <p>3. 特任連携会員を日比谷紀之 (東京大学)、升本順夫 (東京大学)、野村大樹 (北海道大学)、青山道夫 (福島大学) の 4 氏に打診することとなった。委員長から、順次、地球惑星科学委員会に報告し、事務局を通して幹事会に提案する。</p> <p>4. 山形委員長から、平成 29 年 9 月 4 日～6 日に南アフリカ共和国ケープタウンで開催された第 43 回 SCOR 執行理事会の会議内容が報告された。次回総会は平成 30 年 9 月 3 日～5 日に英国プリマスで開催される。(</p> <p>5. 山形委員長から、SCOR 事務局へのアウトリーチ活動などの報告、SCOR 本部のホームページの日本 SCOR に関する記載更新に対処するとの報告があった。平成 30 年 9 月にプリマスで開催される SCOR 総会への代表派遣補助の申込締め切りは来年 1 月 5 日であり、山形委員長と張副委員長の二名で申込みすることになった。</p> <p>6. 第 24 期 SCOR 分科会の活動に関して自由に議論した。おもな内容は次の通りであった。SDG14 との関連、東京大学大気海洋研究所研究船共同利用運営委員会委員の推薦、研究船・練習船等の船舶の利用促進への課題、大型研究計画との関わり方、地球惑星科学委員会との関係、提言等の意見の発出、海洋分野のネットワークの在り方など。提言の作成をめざすこととし、その内容については、海洋科学の振興、海洋分野のネットワーク等の中核として、1 年目に提言の骨子を定め、次年度にワークショップ等を開催し、準備を進めることとなった。</p>

様式第 2 (第12条関係)

	<p>7. 2019 年富山会議について議論した。日本海洋学会大会と連動して SCOR 執行理事会 (30-40 名) と国際シンポジウムを開催するため、大会との関係を考慮しつつ準備委員会を設置し、体制作りを急ぐこととなった。</p> <p>8. GEOTRACES 小委員会の設置および委員を確定した。</p> <p>9. SIMSEA 小委員会の設置および委員を確定した。</p> <p>10. IIOE-2 小委員会の設置および委員を確定した。</p> <p>上記 3 つの小委員会の設置案は委員長が作成し、地球惑星委員会を経て幹事会に提案され審議される。</p> <p>11. 齋藤委員から、SOLAS、IMBER など、他分科会に属する委員会との連携が提案された。</p> <p>2018 年 7 月 2 日第二回分科会：</p> <p>1. 新しい特任連携会員の参加があるため全員が自己紹介をした。青山委員は WG147、野村委員は WG152 に共同議長として参加している。</p> <p>2. 山形委員長と張副委員長より、SCOR 役員の改選があり、議長 1 名、副議長 3 名が推薦されていることが紹介された。2018 年 9 月の SCOR 総会にかけられ、問題なければ全員が役職に就く見通しである。日本からは張副委員長を副議長に推薦している。</p> <p>3. 張副委員長より 2019 年富山に誘致した SCOR 理事会の準備状況が報告された。2019 年 9 月 22 日 (日) に公開講演会、23 日—25 日に理事会を予定している。25 日—29 日は同所にて海洋学会秋季大会が予定されているため、25 日に共催でシンポジウムを開催することを考えている。ちなみに理事会の参加人数は平均して 30 名 (多い時は 40-50 名) 程度である。オブザーバー出席ができる。</p> <p>4. SCOR WG プロポーザルのレビューを行った(資料 1-1 から 1-10)。全委員の採点を Must (5 点)、May(3 点)、Not (1 点) として算出した平均点と出席委員からのコメントを総合的に判断し、SCOR 事務局に次のレビュー結果を提出することにした。Must ランク (MetaZooGene、CSIF)、May ランク (Fluoresce、SOCOMv2、FOO_BP、C-GRASS)、Not ランク (WG-OGOD、CURNet、Coats-BRO)。なお、資料 1-1 に転記ミスがあったが、今回の審査には影響しないことから、閉会後にメール配布で差し替えることにした。</p> <p>5. 沖野委員より、以下のような学術研究船白鳳丸の今後に関する現状の説明と SCOR 分科会における検討の要請がであった (資料 2-1、2-2)。「白鳳丸の老朽化と観測機器の古さが問題になる中、大気海洋研究所ではかねてより代船の検討をしてきたが、JAMSTEC に白鳳丸廃船案があることが判明したため、緊急に白鳳丸存続要望書を賛同する学協会から取り纏めている。これは日本の海洋科学研究の危機であり、日本学術会</p>
--	---

様式第 2 (第12条関係)

	<p>議の勧告に基づいて東京大学海洋研究所と 2 隻の学術研究船（淡青丸・白鳳丸）が建造された歴史的経緯を顧みるならば、容認しがたい事態と考えられる。」 SCOR 分科会として、国連総会で「持続可能な開発のための海洋科学の 10 年」の公式宣言がなされ、我が国においては第三期海洋基本計画が本年 5 月に閣議決定され、科学的知見の充実が主要政策の一つとして取り上げられている折から、こうした緊急事態に対して海洋コミュニティからの声を如何に高めるかについて議論した。意見交換の結果、白鳳丸の緊急問題への対処に加えて、より長期的視点から我が国の海洋教育を含めた海洋調査研究のあるべき姿を描くことにした。前者については年内に SCOR 分科会主催のシンポジウムを開催することとし、沖野委員と役員で内容案を作成することにした。後者については、統計資料などを整理、収集したうえで、「提言」あるいは「報告」として意見を発出することを検討することにした。</p> <p>2018 年 10 月 12 日第三回分科会（メール審議）：公開シンポジウム「海洋観測における研究船の役割：成果と展望」について、賛成多数で承認された。</p> <p>2018 年 12 月 25 日第四回分科会：午前中に分科会、午後公開シンポジウム「海洋観測における研究船の役割：成果と展望」を開催する。</p> <p>2019 年 5 月 23 日第五回分科会：公開シンポジウム「SCOR－海洋学会合同シンポジウム「日本の海洋科学：現在と将来」」について、賛成多数で承認された。</p> <p>2019 年 7 月 4 日第六回分科会：</p> <ol style="list-style-type: none">1. 前回議事録の確認 第 4 回（12 月 25 日）議事録を確認、第 5 回（メール審議、5 月 20 日～23 日）の議事録を承認した。【資料 1-1,1-2,1-3】2. SCOR WG 提案の評価 6 件の提案を 19 名の委員が 3 件ずつ事前評価した結果に基づき、評点が高かった C-GRASS, DISCOVER-C の 2 件、および次点である DeepSea-Decade を中心に議論を行った。その結果、日本 SCOR からは C-GRASS と DISCOVER-C を優劣つけがたく同点として推薦することとした。議論の内容を踏まえ、蒲生委員と山形委員長が SCOR への最終的なコメント文を作成し、SCOR 事務局に提出する（提出期限 8 月 15 日）。なお、SCOR 年会において、どうしても順位をつけなければならない場合は、Must の数が多く評点がわずかに高かった C-GRASS を日本 SCOR として 1 位とする。【資料 2-1（非公開）、2-2（非公開）】3. SCOR 年会準備状況
--	---

様式第 2 (第12条関係)

	<ul style="list-style-type: none">・ 張委員から、9月22日-25日に富山で開催される SCOR 年会の日程案および準備状況について説明があった。Web 上に 25 日午後に Executive Committee があると掲載されているのは 22 日午前の間違いである。分科会委員のオブザーバー参加を歓迎するので、参加者は事前登録すること。[資料 3-1, 3-2, 3-5]・ 升本委員から、SCOR 年会最終日の 9 月 25 日午後に開催される SCOR-海洋学会合同シンポ「日本の海洋科学：現在と将来」のプログラム案と準備状況の説明があった。使用言語は英語とする。プログラム案中の大学英語名の間違いが指摘され (University of Toyama, University of Tsukuba が正しい)、修正することとした。[資料 3-2, 3-3, 3-8]・ 同シンポについて、JAMSTEC と東大気海洋研究所に後援依頼の打診をすることとした (担当：山形委員長、沖野委員)。また、富山の年会をもって退任する SCOR 事務局長の Ed Urban 氏に対し、SCOR 分科会有志として記念品を贈呈することとした。・ 張委員から 9 月 22 日午後に開催予定の SCOR-富山県のジョイントシンポジウムプログラム案が示された。基調講演は英国 PML から Victor Martinez Vicente 博士を招へいし、同時通訳付である。基調講演が長すぎるのではないかとの意見が提出され、議論の結果、講演時間を短縮することにした。[資料 3-4]・ 張委員から、SCOR 年會に引き続き行われる日本海洋学会において、SCOR-GEOTRACES ジョイントセッションが行われる旨の紹介があった。[資料 3-5]・ 張委員から、昨年の SCOR 年會の議事と参加者について資料説明があった。[資料 3-6, 3-7] <h4>4. 小委員会報告</h4> <ul style="list-style-type: none">・ 張委員から 2 月 22 日に行われた GEOTRACES 小委員会の報告があった。[資料 4-1]・ 山形委員長および ISC/RCAP 議長の植松委員から、SIMSEA 小委員会および 5 月 11 日、12 日に北京で開催された SMISEA SC の状況報告があった。日本から東工大の灘岡和夫教授が SC メンバーに就任された。国内小委員会は開催していない。・ 升本委員から、2 月 14 日に行われた IIOE-2 小委員会の報告があった。役員選出、白鳳丸・みらいのインド洋航海の紹介、国際的に作成中のレビューペーパーへの貢献等を議論した。プログラムは 2020 年終了だが、延長を検討中である。議事録は学術会議事務局に提出済み。 <h4>5. 学術の動向</h4> <p>蒲生委員より、準備中の「学術の動向」の特集「研究船による海洋観測」について進捗状況の説明があった。12 月に実施し</p>
--	---

様式第 2 (第12条関係)

		<p>たシンポジウムの記録のみでなく、一般社会への還元に言及する形の特集とするとすることが決定し、講演者等に原稿依頼がされた。11月出版予定。【資料 5-1】</p> <p>6. 共催シンポジウム 窪川委員より、海洋生物学分科会と当分科会の共催で、「国連の持続可能な海洋科学の10年-One Oceanの行動に向けて」シンポジウムを開催する準備中との報告があった。11月6日に開催予定。ターゲット層を明確にしてプログラムを検討すべきとの意見が出た。SCOR分科会からは蒲生委員が担当し、海洋生物学分科会委員長でもある窪川委員と調整していくこととした。【資料 5-2】</p> <p>7. SCOR 分担金 SCOR 分担金の現状について張委員から説明があり、次回の富山の年会において山形委員長から分担金の在り方について意見を述べることとした。</p> <p>2019年12月23日第七回分科会： 報告事項：</p> <p>1. SCOR 年会報告（資料 1-1、資料 1-2、資料 1-3） 富山県で9月23日から25日まで開催された2019年度SCOR総会および理事会について山形委員長より、以下の報告があった。ア) SCOR副議長の張委員が準備・運営全般を担われた3日間の会議は盛会であったこと、イ) Ed Urban氏が事務局長を降板する年にあたり、会期中にその労に感謝する機会が設けられ、分科会もこれまでの労をねぎらい記念品を贈呈したこと、ウ) 2020年1月1日よりPatricia Miloslavich氏が事務局長に就任し、来年は役員選挙があること、エ) 活動中のWG報告の紹介と2019年度申請のWG審議があり、二件を選んだこと、オ) 次回はエクアドルで開催されることなどである。張委員からはSCOR年会の前に富山県との共催で開催した海ごみシンポジウムについて報告があった。シンポジウムの後に企画された高校生との討論会は各国代表に極めて好評であった。なお、11月にEd Urban氏から国内対応担当のSCOR分科会宛に丁寧な礼状をいただいている。</p> <p>2. 日本海洋学会との共催シンポジウムの報告（資料 2-1） SCOR総会の最終日、9月25日（水）午後にはSCOR-日本海洋学会合同で学術会議公開国際シンポジウム「日本の海洋科学：現在と将来」を開催し、両組織が交流した。このシンポジウムの内容に基づいた月刊海洋の特集号が出版される予定である。</p> <p>3. 海洋生物学分科会との共催シンポジウムの報告（資料 3-1） 海洋生物学分科会委員長の窪川委員と山形委員長より11月7日に開催した日本学術会議主催「国連海洋科学の10年-One</p>
--	--	--

様式第2 (第12条関係)

		<p>Ocean の行動に向けて」の説明があり、わが国としての取り組みについて意見交換した。</p> <p>4. 「学術の動向」(11月号) 特集号発行の報告(資料4-1) 蒲生委員より「学術の動向」11月号に「研究船による海洋観測 ―地球環境問題解明と社会への成果還元へ向け―」が掲載されたとの報告があった(資料4-1)。この特集は2018年12月25日に開催した学術会議主催公開シンポジウム「海洋観測における研究船の役割：成果と展望」に基づいている。</p> <p>5. 研究船関係動向 沖野委員より白鳳丸の改造、延命に向けた補正予算が通過したとの報告があった。学会等からの要望書および当分科会主催のシンポジウムへの感謝が述べられた。白鳳丸改造中の運航休止に伴う問題に関しては方策を考えるとの報告があった。</p> <p>審議事項：</p> <p>1. 持続可能な開発のための国連海洋科学の10年への取り組みについて 2021年より開始される国連海洋科学の10年に対する取組みを議論した。関係省庁およびIOCの動向に沿いながらSCOR分科会が国連海洋科学の10年の実施に協力していくことが承認された。日比谷委員が中心となってWGを立ち上げることとなった。</p> <p>2. 25期に向けた準備 9月30日で24期は終了する。山形委員長より第25期の会員と連携会員の改選にあたり、分科会の活動の継続、発展に向けて、次期委員候補者となる方々の推薦を積極的に行うよう要請があり、承認された。なお次回(第8回)は恒例のSCOR WG 審査に合わせて7月初旬ごろに行うことを確認して閉会した。</p> <p>2020年7月30日第八回分科会：</p> <p>1. SCOR 国際関係(資料1-1、資料1-2、参考資料1) 山形委員長より2020年SCOR年会は、COVID-19感染拡大に伴う措置として、10月20-22日にオンラインで開催される予定との報告があった(資料1-1)。新SCOR執行部案がまとめられ、選考委員から加盟国に提案された。韓国のSinjae Yoo氏がアジア初の議長に、張委員は副議長に再選される予定である(資料1-2)。10月の年会で承認される。議長のMarie氏が2021年に始まる「国連海洋科学の10年」に関して、SCORの視点から分かりやすくブログで解説しているので、分科会メンバーで共有した(参考資料1)。</p> <p>2. 国連海洋科学の10年関係(資料1-3、資料1-4、資料1-5、参考資料2、参考資料3) 植松委員より「国連海洋科学の10年」の実行計画で目指すも</p>
--	--	---

様式第 2 (第12条関係)

	<p>の、と題して PPT を用いて準備の進捗について説明があった (非公開：参考資料 2)。植松委員は 19 名の Executive Planning Group のメンバーである。変更点としては計画の Decade Outcomes に Inspiring and Engaging Ocean が追加されて 7 つになったことがある。今後のスケジュールは、8 月に最終ドラフトが作成され、10 月に Call for Action を実施した後、来年 1 月に開始となる。資金繰りは各国に委ねられる方向にある。</p> <p>山形委員長より地球惑星委員会に対して SCOR 分科会活動報告を 7 月 7 日付で提出したこと、この報告に国連海洋科学の 10 年への SCOR 分科会の関与についても追記したことの説明があった (資料 1-3)。</p> <p>山形委員長より月刊海洋 2020 年 8 月号として出版した「日本の海洋科学：現在と将来」について報告があった。これは 2019 年に富山で開催した SCOR 年会期間中に日本海洋学会と共催したシンポジウムを土台にしたものである (資料 1-4)。SCOR 年会の成功に尽力した張副委員長に感謝の意が示された。また、山形委員長より、海洋科学に関する国連決議は半世紀前にもなされ、我が国の海洋研究体制強化に果たした役割に触れた序文の説明があった (参考資料 3)。</p> <p>窪川委員より「学術の動向」(令和 3 年 1 月号) 特集企画が確定したこと、また産官学の勉強会構想について報告があった (資料 1-5)。植松委員より学術会議の活動が重要であるとの発言があり、幅広い支援体制の構築に向けた国内委員会の必要性について意見交換がなされた。</p>
<p>内規第 3 (国際学術団体の要件関係)</p>	<p>国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である</p> <p>①. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://scor-int.org/scor/about/constitution/)</p> <p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)</p> <p>①. 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (https://scor-int.org/scor/partners/; https://council.science/what-we-do/research-programmes/thematic-organizations/scientific-committee-on-oceanic-research-scor)</p>

様式第 2 (第12条関係)

<p>下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印)</p> <p>ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>① 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
<p>10 カ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p>①. 該当する 2. 該当しない</p>	
<p>加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載</p>	<p>(31ヶ国と1地域(台湾))</p>
	<p>・各国代表会員名/国名</p> <p>Trevor McDougall (Australia), Jan Mees (Belgium), Sun Song (China), Jorma Kuparinen(Finland), Catherine Beltran (France), Tatiana Ilyina (Germany), M.M. Sarin (India), Annalia Griffa (Italy), Peter Burkill (United Kingdom), Bradley Moran(United States)</p>